

## ニッポンの印象 (窓 論説委員室から 1990・1・9 夕刊)



世界最高といわれるデンマーク高齢者福祉。それを築いた中心人物ベント・R・アンデルセン元福祉相から長い手紙が届いた。先ごろ日本を訪れた時の印象記だった。一端を紹介すると一。

大阪でネタキリロージンの家庭を3軒訪ねた。

決して貧しい暮らしぶりではない。だが、住まいは狭く、世話する側はデンマークの何倍もの努力が要るように見受けられた。

2階への狭くて急な階段。若いとはいえない女性が、夫の母のために日に何度もここを往復して食

事を運び、汚れた衣服やオムツを替えていた。それを何年も何年も！

日本の高齢者政策は、長期的には、まず住宅政策が、また短期的にはホームヘルパー、補助器具、住宅の改造が重要だと思われる。

今、30万人近いネタキリロージンが在宅生活を送っているという。本人や家族の苦境を思いやる感性のある人なら、この数字にはショックを受けるだろう。

ハンディを持った高齢者の介護のニーズは圧倒的に多いのに、人的資源や施設は極めて少ない。どのような施設への入所が適切か、退所したらどこでどう暮らすのが良いかといった老人ケアサービスの全体的な流れについての関心も乏しいようにみえた。

大阪で訪ねた3人のネタキリロージンは、満足なケアを受けずに、少なくとも6年間は寝たきり状態に置かれていた。これは、まさに社会サービスの不足によるものであり、高齢者の人生や生活全体を見渡して支える理念が欠けているためではないだろうか。

これからの日本が社会資源の際限のない浪費を避けようとするならば、医療・福祉サービスの首尾一貫性と整合性に関心を向けることをお勧めしたいと思う。

民間保険や営利動機に依存するシステムは、サービス全体の構造を総合化するより、ばらばらにする危険性をはらんでいる……。

わずか10日間の滞在なのに、さすが、社会政策論の高名な大学教授。日本の福祉と医療の弱点を見抜かれてしまったようだ。

(写真は、その後日本を訪問して感動した「このゆびと〜まれ」の盲目の少女が編んだフクロウの壁掛けのプレゼントしたときの笑顔コペンハーゲンのチボリ公園で)